



自分の可能性を 狭めてはいけない

Maki Kawai

川合眞紀

分子科学研究所所長 日本化学会会長

今年、日本化学会史上初の女性会長に就任した川合眞紀氏。
分子科学研究所所長も務めながら日本のアカデミアの在り方を見渡し、
「このままではこの国は壊れる」と警鐘を鳴らす。

女性研究者が少ない理由

日本化学会の前身の化学会は1878（明治11）年に結成され、今年（2018）は創立140年にあたります。その140年の長い歴史の中で、女性が会長になったのは私が初めてのことです。2008年に日本化学会賞をいただいたときもどなたかが調べてくださって、女性の受賞者は私が初めてだったことが分かりました。

学術の世界の化学の分野では、性差はあまり関係ありません。ただ、諸外国に比べ日本の化学会は女性の比率が低いのが実情です。国によっ

ても違いますがラテン系は総じて女性が多いようです。OECD（経済協力開発機構）加盟国では日本と韓国が最下位争いをしていましたが、最近韓国では女性教授がすごく増えています。いずれ日本だけがとり残されてしまうのではないのでしょうか。

女性が少ないことには文化的な背景があると思います。理系学部の中でも医学、薬学系は女性が多いことにそれが表れています。結婚しても何かあったとき稼ぐことができないといけないので、手に職をつけておこうという考えがぬけていないのでしょうか。そこには、そもそも女性は

家庭に入ったら仕事をしないという考え方があります。そういう文化がいまだに色濃く残っているような気がします。

女性が少ないことについて、女性差別があると指摘する人もいます。しかし、私自身に関して言えば、研究者として生きてきた中で女性だから不利だと感じた経験はありません。むしろ得したような気もします。女性研究者が少ないので、ちょっと気の利いた仕事をするとすぐ名前を覚えてもらえたものです。

大きく広がった分子科学

それでも子育てのときは大変でした。夫が大阪大学の教員をしているとき、私が理化学研究所に採用され、仕事をしながら2人の子どもの世話をしなければならなかったのです。「ご主人と離れて、どうやって生活していくのですか」と聞かれたこともありました。おそらく同じ立場でも男性ならそういう質問はされないでしょう。女性だから心配される。そのこと自体、バイアスがかかっている証左です。

東大の教養学部を終える頃は物理学科に進学しようと思っていました。化学はそれほど好きではありません





不安を抱かず、自信を持って前に進みなさい。 研究できる場は国内だけではない。 海外も含めて広く自分の進路を考えてほしい。

かわい・まき 1952年、東京都生まれ。東京大学理学部化学科卒業。同大学院理学系研究科博士課程修了。理学博士。
理化学研究所主任研究員、東京大学大学院新領域創成科学研究科物質系専攻教授、理化学研究所理事などを経て、
2016年4月に自然科学研究機構分子科学研究所の所長に就任。2018年度・2019年度日本化学会会長。ポスドク時代は5年間で4回職場を変えたという。

でした。ところがあるとき、物理学科の先生が「あまり女子は欲しくない」と言っているのが聞こえてきてしまったのです。一方で化学科の先生は「化学は面白いですよ。女性で活躍している人もいっぱいいます」と熱心に話され、卒業生がどういうところで働いているか分かる手書きのリストまでつくってくださいました。それに感動して化学科に進学し

たのですが、もし私が男性だったら、きっと物理学科に進学していたでしょう。

分子科学研究所は、大学共同利用機関法人です。国立大学法人法に基づき設置されている大学共同利用機関は全国に17機関があります。国立天文台や国際日本文化研究センターも大学共同利用機関です。

1975年に分子科学研究所が創設されたとき、分子科学は新しい学問分野でした。ケミストリーとフィジックスの考え方が融合して新しい材料科学の夜明けをつくる。そういう発想でつくられたのが分子科学研究所です。当時は、宇宙空間に存在する

分子の分析は、分子科学が最も得意とするところでした。だから天文台との交流も盛んだったと聞いています。現在は、天文学や宇宙物理学の研究者が、宇宙にはどんな分子があるかとか、どういう環境だったらアミノ酸ができるかといった化学反応まで語るようになってきました。この40数年間で分子科学は大きく広がり、分子科学の考え方が他の分野にも影響を及ぼすようになったのです。

女に二言なし

その分子科学研究所の所長に着任するとき、マネジメントに専念する

ように言われました。所長は原則として研究禁止なのです。

昨年3月に東大を退官するとき、若いいい研究者がたくさん育っていたので、研究室をすっかりたたみました。本音でいえば、あれもやりたい、これもやりたいという気持ちは残っていましたが、もし分子科学研究所で研究するのなら、過去を全部断ち切るくらいの覚悟がなければいけない。惰性で研究をするのは嫌だと思い、潔くマネジメントに専念することにしました。女に二言なし、です。

研究者時代は表面科学を専門としていました。金属表面における分子の振動励起とそれともなう表面化学反応など、かなり広い領域の研究に取り組んできました。その間に触媒から光触媒、さらに材料の表面科学へと新しい領域の研究にもチャレンジしてきました。新しい分野の研究でも、始めて3年ほどで国際会議に招待される程度の成果を出してきました。

もちろん研究は自分ひとりでできるものではありません。一緒にやる仲間が常にいました。研究においては、こんなことができたらすごいという思いを仲間が共有することが大事です。それがあれば同じ価値観で同じところを目指すことができます。新しい分野でもそれなりに結果を出してこられたのも、仲間選びがよかったからだと思っています。

研究を止めるのは いつでもできる

以前、非常に優秀な女性研究者から、研究が辛いと言われたことがありました。「終わりが見えなくて……」と、彼女は言っていました。一方では、寝食を忘れるほど研究に没頭し続ける人もいます。そういう人は単に努力が好きだけではありません。研究を進めていると、想定

外の面白さを発見することがあります。そういう面白さを自分で見出せない、研究は続けられません。

新しい発見をし、わくわくしながらそれを追求していくとまた新しい発見がある。そういうことの繰り返しが化学研究の面白さです。ゴールを設定し、そこに到達したら終わりというような研究は化学に適していません。前人未到の山道だと、どこに道があるか分かりません。もしかしたら道がないかもしれない。

しかし、想定したとおりの道を進んでいくだけの研究なら誰でもできます。私も辛い、辞めたいと思ったことはあります。でも、研究を止めることはいつでもできると考えると、少し気が楽になります。そしてまた研究に没頭していくと面白いものが見えてきて歓喜する。化学の研究とはそういうものです。

分子科学研究所は原則、内部昇進を禁止しています。外部の大学や研究機関、企業などと常に人事交流をし、ここで育った人が外部に出ていくことで成果を広げられる。あるいは外部から来た人がこの研究所で付加価値を高めてまた外部に出ていく。この研究所だけで研究人生を全うする人はほぼいません。閉じられた世界に居続けてはいけません。

基礎研究を 大事にしない危うさ

この10年ほど、政府はイノベーション政策を推進し、論文より特許

を書きなさいと言ってきました。先端的な論文をガンガン書いていた研究室の多くも今は特許を書くことを優先させています。こんな状態では、この国の科学研究は壊れると思います。基礎的な研究をもっと大事にすべきです。基礎研究に進む研究者が減っているという人もいますが、予算がそちらに流れれば人材も集まるはずですよ。そういうことを真剣に考えないといけない時期に日本は来ていると思います。

日本の科学研究の論文数や論文の引用数が減っているのは事実です。インドや中国などが台頭し、相対的に日本のポジションは下がっています。しかし、研究者のクオリティが下がっているとは思いません。

ポストドク問題が全くないとは言いませんが、若い研究者は不安など抱いているときではありません。研究できる場合は、国内のアカデミアだけではありません。海外も含めて多様なフィールドがありますから、広く自分の進路を考えてほしいものです。研究室に閉じこもらず、広い知識を身に付けるようにしてください。研究自体ももっと異分野に目を向けたらどうでしょうか。そこにもっと面白いものがあるかもしれませんし、周りを見たら自分のやっていることの新しい価値や広がり気づくかもしれません。

懸命に努力することは当たり前。努力の裏付けを得て自信を持ち、自分の可能性を狭めず、自信を持って前に進んでほしいと思います。